戦後 80 年を契機とした平和学習活動について
―周南市の戦中・戦後復興を踏まえた将来への提言―

Peace education activities marking the 80th years from the end of the war
Proposals for the future based on Shunan City's wartime and postwar reconstruction

伏木貞文

要旨

2025 年、第二次世界大戦後 80 年を契機に周南公立大学（以下「本学」という。）経済経営学部の地域ゼミにおいて、周南市の戦中・戦後復興の動きについて調査活動を進め、同年末に発表会を行い、学生のプロポーザル（提言書）を周南市に手渡した。また、地域ゼミ所属の学生などが創設した「平和志向のまちづくりの会」の活動が、同年 5 月に公益財団法人 山口きらめき財団（以下「財団」という。）の若者チャレンジ応援事業に採択され、発表会と同時に実施した周南市民への発信面を担った。これにより、学習活動と発信活動の二階建ての取組みとなり、結果として、学習活動で一定の成果が見られた。
キーワード：平和、空襲、戦後復興、まちづくり

1．はじめに

1-1　活動の目的

2024 年秋、翌年が第 2 次世界大戦の終戦から 80 年にあたることから、本学学生に対し、改めて何らかの平和教育の必要性を認識していた折、周南市文化スポーツ観光部文化振興課と協議し、周南市のテーマである「『戦後 80 年想

いをつなぐ、未来へ。』昭和100年これからの周南」の関連行事（以下「戦後80年行事」という。）に学生が能動的に参画するとともに、学びを得る活動を進めることとなった。周南市として若者をはじめ市民の平和への関心を高めたいとの意図と、公立大学として地域の歴史を紐解き考察することによる教育効果の両面に期待した。これにより、学生が周南市の戦中・戦後の歩みを調べつつ、80年行事に参加し、知識の会得と体験を通じて学びを深めることを狙いとした。

1-2　活動の前提

平和に対する学生たちの意識は、活動開始当初、実際の活動の対象として、学生からは、「戦争がない状態」という大規模の争いから、「犯罪や災害がない」という比較的身近なリスクや、「安定した日常生活」、「差別がない」、「多様性の尊重」、「環境汚染」、「動植物などすべての生き物の安全・安心」など広範な平和のイメージが語られた。また、「幸福」と同義であるとの認識もあった。

結論として、学生の実態に合わせ、一つのイメージに集約せず意見の全体を

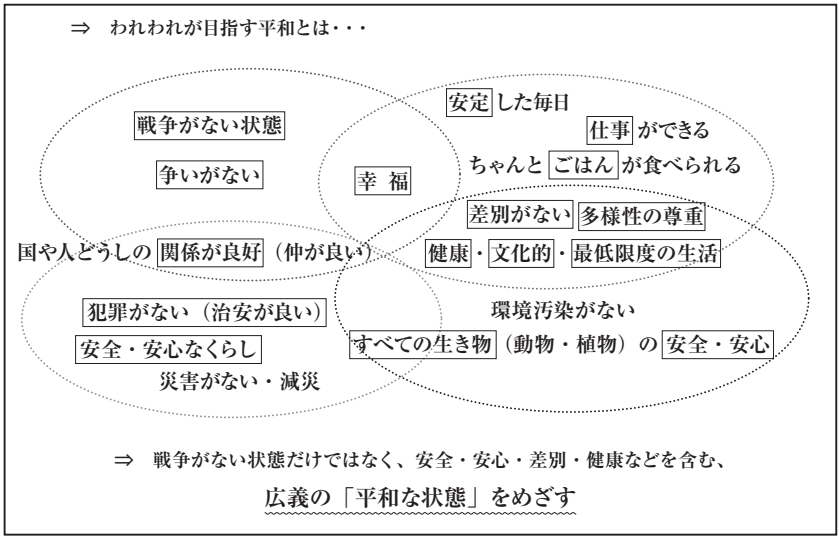

図１　学生による平和のイメージ

自分たちの「平和のイメージ」として捉えることとした。

池野（2009）は、平和教育は、直接的暴力である戦争やそれに関わる問題を扱う「直接的平和」教育と、貧困、抑圧、差別などに関わる問題について、その問題解決に関連する行動を促す「間接的平和」教育があり、後者は平和意識に関わる意識や人間関係など、前者の土壌を作る教育であるとしている。図１から、今回の活動の対象は、後者の「間接的平和」教育に分類されると解される。学生の意識は、平和は大切であると思いながらも、戦争は実感が伴わない昔の事象として捉えている認識があったため、今回の活動は戦時中の出来事の掘り起こしだけでなく、その後の学生自身が生きている現在までの流れも含めて把握して、学生の考える平和＝間接的平和を達成するためにはどうすればよいかを探ることとした。

活動の類型としては、（ⅰ）文献・資料等の学習、（ⅱ）関係施設等の調査、（ⅲ）関連行事への参加、（ⅳ）関係者からの聴取、（ⅴ）とりまとめ作業およびアウトプット、に分かれる。時間経過に伴う学習・調査活動の概況は次表のとおり。（ⅲ）関連行事への参加は短期間に行事が集中することから参加行事を振り分けて参加した以外は、原則、全員参加の活動とした。

活動体制は、大きく２つのグループに分け、戦争の史跡等の調査や記録、記憶の掘り起こしを中心に行う「メモリ・レガシー班」（10名）と、復興のあゆみの振り返るとともに、平和に視点をおいた未来のまちづくりへの提言・発信

表１　学習・調査活動の概況

主体＼月	4月	5月	6月	7月	8月	10月	11月	12月
地域ゼミ	活動方針検討グループ分け	（ⅰ）文献・資料等の調査	（ⅱ）大津島（回天記念館）訪問	（ⅱ）民俗資料館企画展	（ⅲ）各種終戦関連行事への参加	（ⅳ）戦災体験者、有識者等からの聴取	（ⅴ）発表資料、提言書の調製	（ⅴ）12/13活動成果発表会
平和志向のまちづくりの会		若者チャレンジ応援事業採択				（ⅴ）パネル展示データ作成 パネルディスカッション検討	（ⅴ）「平和の島」スピーチコンテストでの発表 パネル展示データ作成	（ⅴ）12/13パネル展示、パネルディスカッション、ビデオメッセージ上映

※９月は夏季休業中の帰省等で個人での作業とした。

を中心に行う「クリエイト班」（6 名）において活動を進めた。

どちらの班に属しても、活動の基礎となる、（ｉ）文献・資料等の学習から（iv）関係者からの聴取までは、共通部分として同じ活動を行うが、一つの活動が終わった後の意見交換や、後半の（ｖ）とりまとめ作業は、班別で行った。

２．調査・学習

2-1　文献・資料等の学習

文献・資料等の学習および調査では、戦中・戦後の記録（文字・写真・地図等）から、実体験を得たかのような具体的な情報や、口述では知ることが難しい詳細なデータ等を得ることが肝要となる。しかし、活動開始当初は、戦時中の悲惨な様相を示す写真や体験談の描写などに対して、学生がどの程度の耐性があるかが不明であったため、具体的な様態に触れていない描写のものを教員

表２　文献・資料等の学習

学習目的	文献・資料等
１．空襲、戦災の状況把握	a. 徳山の空襲を語り継ぐ会（1985）「街を焼かれて－戦災 40 周年徳山空襲の証言」 b. 改訂版出版実行委員会（2012）「目で見る　徳山の歴史改訂版」 c. 玉野知之（1979）「ふるさとの思い出写真集　明治大正昭和　徳山」国書刊行会 d. 周南市（2025）「戦後 80 年事業戦後80年思いをつなぐ未来へ。昭和100年これからの周南」 e. 工藤洋三（2006）「写真が語る　山口県の空襲　米軍が記録した偵察・攻撃・損害」 f. 徳山空襲のビデオをつくる会（1999）「語りつぐ徳山空襲」（映像 3 部作）
２．戦時中の生活の状況把握	g. 齋藤美奈子（2015）「戦火のレシピ」岩波現代文庫 上記 a ～ d（再掲）
３．戦後の生活、復興の状況把握	h. 経済産業省ウェブサイト（2024）「繊維産業の現状と政策について」 i. 農林水産省ウェブサイト「食品ロスについて」 上記 a ～ d（再掲）

が選び手探りで読み進めた。その後、回天記念館への訪問など調査が進むにつれて、学生が自ら選択した記録等を取り入れた。参照した主な文献・資料等は表２のとおりであり、主に、授業時間内に一定時間を設定して各自が読み進める方法をとった。

2-1　関係施設の調査

2-2-1　回天記念館

文献・資料等の学習を進めつつ、6 月 22 日と 7 月 8 日に大津島にある回天にまつわる施設、記念館を視察した。

馬島港に降り立つと、周辺に店舗がない静かな海外線を進み、小高い丘の上に回天記念館があった。エントランスに設置されている亡くなられた回天搭乗員（技術者含む）の銘碑の出迎えを受け入館すると、学生たちは、搭乗員の手記、当時の軍服、出撃前の写真、搭乗員の肉声などの前で立ち止まってメモを取り情報を吸収しようとしていた。

回天訓練基地跡に向かう小径は往時をしのばせる高いコンクリート塀が残り、整備工場や天下試験場跡などが島民からは活動が隔離されていた状態であったことを伺わせた。

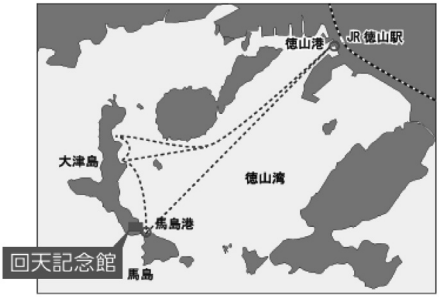

図 2-1　大津島（航路図）

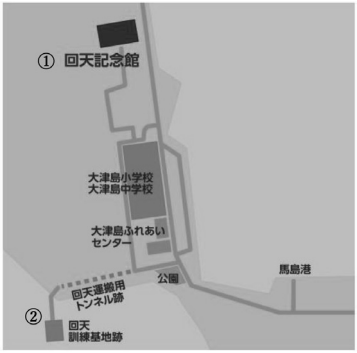

図 2-2　回天記念館（島内図）

【出典】回天記念館リーフレット
https://www.city.shunan.lg.jp/uploaded/attachment/107609.pdf（2025.12.20 確認）

9：00　徳山港フェリーターミナル　集合
9：30　徳山港　発（鼓海Ⅱ）
9：48　馬島港　着、下船
9：55　馬島港　発
↓ 徒歩（約６分、約 400 m）
10：01　出撃桟橋跡３分
↓ 徒歩（約３分、約 150 m）
10：07　整備工場跡、点火試験場跡、危険物貯蔵庫跡、変電所跡 10 分
※建物老朽化のため外観を視察
↓ 徒歩（約１分、約 50 m）
10：18　地獄の階段、回天坂３分　　※危険につき通行不可
↓ 徒歩（約７分、約 350 m）
10：28　① 回天記念館（下士官宿舎、練兵場跡）40 分
↓ 徒歩（約 12 分、約 600 m）
11：20　回天運搬用トンネル３分
↓ 徒歩（約３分、約 150 m）
11：26　② 回天訓練基地跡 20 分
↓ 徒歩（約 10 分、約 500 m）
11：56　整備工場入口の門柱（大津島公園）
↓ 徒歩（約３分、約 150 m）
11：59　ふれあいセンター（昼食・休憩）30 分
↓ 徒歩（約３分、約 150 m）
12：32　馬島港　着
13：00　馬島港　発（フェリー新大津島）
13：44　徳山港　着、下船、説明
14：00　徳山港フェリーターミナル　解散

図３　大津島視察行程

大津島訪問を経て、学生は、一様に当時の厳しい状況を肌で感じ、今を生きる学生には信じられない境遇に身を置かざるを得なかった若者たちに思いを馳せていた。明るい表情で出陣している写真や、回天に搭乗することを前向きにとらえた手記などから、家族や大切な人を守ることや、自分の命を賭して、明るい将来があることを信じて出陣したとするなどの感想があった。

「情報があふれる今の社会では、受け取った情報を鵜呑みにせず、その背景や意図を問い直す批判的思考力が求められます。また、異なる立場や価値観に耳を傾ける姿勢を持つことで、偏った見方に陥ることを防ぐことができます。教育は、知識の伝達だけでなく、こうした思考の土台を育む場であるべきです。

過去の出来事を『歴史』として片づけるのではなく、『今を生きる私たちの選択に関わるもの』として捉え直すこと。平和を守る意志を持ち続けるためには、事実に基づいた教育と、自由に考え、語り合える環境を次世代に残すことが、私たち一人ひとりの責任なのだと改めて感じました。」

図４　ある学生の感想から

このように、読み取った事柄から現代に通じるリスクを指摘し、教育の重要性や自分たちに求められる心構えに言及する学生のほか、「このことを将来の人に伝える必要がある」と戦争の記憶を語り継ぐ意識が見られる感想もあり、現地訪問の意義を改めて感じた。

その一方で、「かわいそう」「同じことを繰り返してはならない」など当時の時勢を否定するまでで思考が停滞する学生も多かった。

日程の関係で学生個人の振り返りで終わってしまい、ディスカッション等により学生同士の考えを交換し改めて自分の意見を持ち直す機会を十分設定できなかったことが課題として残った。

2-2-2　周南市民俗資料館（企画展）

7月には、戦時中のくらしに関する情報を入手するため、周南市民俗資料館企画展「戦中・戦後のくらし」（2025年6月2日～9月29日）を訪問した。

【企画展概要】

・戦時中から戦後にかけての人々の暮らしに焦点を当て紹介
・服や配給切符など当時の生活の様子が分かるものおよそ100点が展示
・陶器製の定錘（じゅうすい）や湯たんぽ、配給切符、銅からアルミや錫（すず）に変化した貨幣、軍服や日章旗、もんぺなどを展示。体験コーナーでは、メンコやベーゴマといった当時の遊び道具にも触れられた。
・戦時中武器の生産に使うために、一般家庭の金属も回収されたことから、日

用品の多くを陶器で代用していたことなどを知ることができた。

・徳山空襲の体験者の証言映像「未来に伝える徳山空襲と戦争の記憶～平和への願い」も上映し、焼け野原となった市街地の地図や写真を展示。

大津島の回天記念館では、手記や写真などから特攻に至るまでの招集、訓練、出撃において搭乗員たちが抱く緊張感、犠牲心、悲壮感が一体となった強い思いが感じられた一方、本企画展では、戦時中の日常生活の中に戦争が入り込む様子が、配給切符や家庭から鉄や銅の供出を呼びかけるポスター、陶器製の湯たんぽ、分銅など現物から当時の生活が手に取るようにわかる仕掛けとなっていた。

また、戦争体験者（徳山空襲）のインタビュー動画が上映されており、大人がしゃがまなければ入れないほどの防空壕に大勢の人が入って、湿気がひどく蚊に悩まされ続けたことや、徳山の燃料タンクの空襲で油が海に流れて文字どおり火の海になっていたことなど、実際の体験者でなければ知り得ない話が続き学生は聞き入っていた。また、調理道具など身近な生活品の展示のほか、遊び道具（けん玉、コマ）を実際に体験ができるコーナーが用意されていた。

学生からは、戦時中の生活の困難さに驚きつつ、現在と離れた感覚であった当時のことが本当に実在していたことに改めて気付いたことや、日常が一変することの恐怖、国民的な熱狂にも後押しされて始まった戦争がなぜ自分たちを苦しめてしまうに至ったのかなどに注目する感想が見られた。

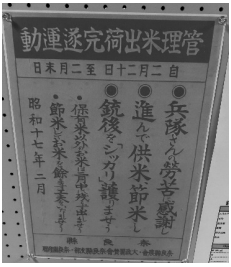

図５　米の供出を促すポスター

図６　鉄、銅の供出を促すポスター

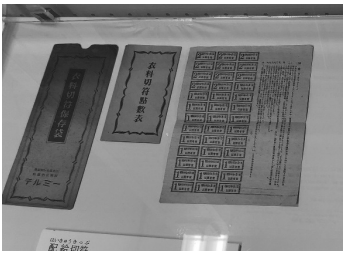

図７　配給切符

図８　日章旗

図９　モンペ

図 10　ゲートル

図 11　防毒マスク

図 12　昔のあそび体験

３．体験活動

文献・資料等の確認を進めつつ、７月から活動を通じた学習を進めた。足を運んで直接視覚、聴覚などを使って入手する情報と、イベント等での発言、戦災体験者等からの聴き取りなどを通じて学習効果を高めることを意図した。

3-1　戦後 80 年行事への参加

3-1-1　演劇「あヽ大津島　碧き海」（周南市文化会館）

昭和 19 年、第二次世界大戦末期、将来の夢や希望に満ち溢れていた若者が戦争に巻き込まれていく。軍隊に入隊した彼らに「回天特別攻撃隊」の特攻要員募集要綱が届けられた。彼らは厳しい訓練を耐え抜き、最後の戦いに挑んだ。現代において、回天に搭乗できず生き残った老人と若い新聞記者とのやりとりを通じて当時の出来事を振り返る形で展開する、戦時中の青春の儚さと戦争の悲惨さを訴える劇であった。

８月３日に劇を鑑賞し、学生からは、家族や恋人を大切にする気持ちと、国に貢献したい気持ちで葛藤する様子や戦争の非人道性が伝わってきたなどの意見が聞かれた。

3-1-2　講演会「米軍記録による徳山空襲」（徳山保健センター）

８月９日、元徳山高等専門学校教授の工藤洋三氏が、渡米し長年をかけて収集した徳山空襲関係の写真やそれに基づく分析内容を紹介した。

徳山空襲は２度にわたって行われ、1945 年５月には海軍第三燃料廠が、７月には市街地が空襲された。旧徳山市の市史によると、５月 10 日に海軍燃料廠や大浦油槽所が、７月 26 日深夜から 27 日未明には市街地が空襲され、５月に五百数十人、７月は 482 人が死亡した。１回目の空襲は九州方面の海軍の燃料基地としての機能が重視されたためであった。沖縄を制圧しようとしていた米軍にとって沖縄を支援する九州方面の海軍基地（航空機）の燃料基地である徳山の燃料廠を空襲することでその動きを止めたい狙いがあった。２回目の空襲は、国民の戦意を削ぐ目的で、中小都市を計画的に空襲した。徳山は人口３

～４万人程度の小都市であったが、防府を含め沿岸の工業地帯への労働力供給の面が重要視された側面もある。リト・モザイク（照準点参照用集成図）には、NTT 徳山ビル付近を中心に半径 900m の円が描かれていた。

また、徳山空襲前後の写真により、旧徳山市街地の９割が焼けたという被害の大きさと、空襲前に木造家屋の火災延焼を防ぐため中心部の建物を撤去し防火エリアをつくる「建物疎開」が行われている様子が見てとれた。

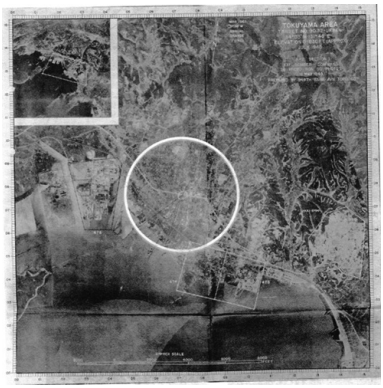

図 13　リト・モザイク

出典：工藤洋三氏「米軍が記録した徳山空襲」
講演資料（2025 年 8 月 9 日）

3-1-3　戦後 80 年子ども向けワークショップ（周南市民俗資料館）

8 月 13 日、小学生以下の子ども 12 人、保護者 6 人、大学生 6 人が参加した。戦争体験者の話をもとに子ども同士でディスカッション（ピースディスカッション）を行われた。また、すいとん試食会や昔あそびの体験が行われた。

ピースディスカッションでは、大学生はコーディネート役を務め、小学生以下の子どもたちの意見を引き出した。また、すいとん試食会では、周南市職員が当時のすいとんを再現したものを参考に作ったものを賞味した。

図 14　ピースディスカッション

図 15　すいとん試食会

3-1-4　紙芝居「平和を愛する徳山大仏」（周南市役所港町庁舎）

8 月 20 日、紙芝居に学生 1 名が参加した。徳山大仏は、1943 年に徳山在住の石工、伊ヶ崎父子により、現在の周南市築港町に造立された。45 年 7 月の徳山市街地空襲で被災し、大仏脇にあった防空壕に避難した人々も命を落とした。54 年に現在の飯島町（本正寺境内）に移転、補修し、開眼供養を行った。現在も、大仏の頭部には空襲時の爆弾の痕跡が残っており、台座の下には、空襲の死亡者、人間魚雷「回天」の戦死者等の名簿が納められている。今も空襲当時の痕跡が残る大仏があると知り、空襲を現実のものと実感した。

3-2　戦中・戦後復興の体験者・有識者等からの聴取

3-2-1　河村啓太郎氏（周南市在住・まちづくり会社代表）インタビュー

（1）周南市の歴史・ふりかえり

① 周南市（徳山）の戦時中から戦後の家業再興

・戦時中の徳山は旧海軍基地があり、山陽本線の終着駅として中国地方と九州を結ぶ結節点であり、軍港と交通の要所として非常に栄えていた。

・創業 125 年の河村さんの家業は、戦災をうけたが、避難時に持ち出せた現金を元手に商売を再興できた。戦後は物資不足の中、仕入れた商品が飛ぶように売れ、大阪から衣料品を仕入れて 1 週間で 1.2 倍の利益をよんだ。

・国土交通省の徳山出身の方がプロジェクトリーダーとして、最先端の都市計画を導入し、計画的なまちづくりを実施した。市役所や道路配置などを計画的に整備した。戦後復興の都市計画は徳山のまちづくりの絶対に外せないキーワードである。徳山駅を背にして、御幸通、岐山通、国道 2 号線が「都心軸」として戦後すぐに形成され、現在の街づくりの屋台骨となっている。

・他の街と異なり、周南市は駅と市役所などの都市機能が一つにまとまった優れた都市構造を持っている。駅前の土地所有者が商店街に権利を移転することで計画的な商店街が形成された。現在、ふたたび、法務局、社会保険事務所、税務署などの都市機能が集約されつつあるのは、当時しっかりした都市計画がされていたためである。コンパクトシティの理想に近づいている。

②産業発展と商業の盛衰

・戦後、燃料廠跡に出光が製油所を設置し、東ソー、トクヤマなどの素材系メーカーが産業を形成した。産業の発展により飲食店や小売店が繁盛し、競艇場の誘致により多額の収入を市にもたらしている。

・遠石八幡宮の先々代宮司（元徳山市長）や高村代議士の祖父（元徳山市長）の世代の功績が徳山の発展の基礎を築いた。積み重ねによって今の繁栄がもたらされている。

・旧徳山市の人口 10 万人に加えて近隣市からの買い物客で商店街が賑わい、商圏 30 万人を抱えていた。夜 10 時まで店を開けており、その時間まで子どもは縄跳びをして遊んでいたような時代だった。

・郊外型ショッピングセンターが台頭してきたときに、まだ商店街にも人が来ていたので、意見が折り合わずに、力を合わせてそれに伍するようなことができなかった。

③徳山駅周辺の商店街と建築物の変遷

・銀南街商店街は木造 2 階建ての長屋が連なっていたが、2 回の火事を経験し、現在は鉄筋コンクリート造に建て替えられている。

・中央街商店街は戦後から現在まで燃えずに残っている徳山で最も古い商店街で、銀南街から中央街や再開発地区まで見渡せるスポットに行くと、戦後に建物が立て替えられていった様子がよくわかる。ただし、今は戦争の痕跡はほとんど残っていない。

（2）まちづくりと平和

① まちづくりの課題と改革の取り組み

・まちづくりを推進するのも妨げるのも「人」である。自分がまちづくりに参画した 16 年前は年配の商店街役員などの関係者が改革を妨げていた。最初は「まちづくり」ではなく「まち壊し」として、新しい担い手にかえることに注力した。まちづくりは最低でも 10 年、理想は 20 年かけて徐々に変えていくべき。

・周南市中心市街地活性化協議会の設置により、関係者間の合意形成の仕組みが構築できた。周南市と商工会議所の関係が改善され、定期的な会議で、み

んなで話し合って物事を決める仕組みができた。

②まちづくりの難しさと経済合理性の重要性

・「まちづくり」という言葉については、多くの人が他人事で好き勝手なことが言えるマジックキーワードである。しかし、実態としては、たとえば、駅前再開発事業では 34 人の地権者全員と向き合い、印鑑を押してもらう必要があり、非常に困難なプロセス。

・まちづくりの本質は徳山駅周辺エリアで稼げる金額を増やすこと、つまり経済効率性を上げることである。争いがなく、住みやすいということは大事だが、経済合理性がないところにはそうした付加価値も到来しない。

・まちづくりは、事業を起こす覚悟がある人を呼び寄せることが難しい。責任感を持ってまちづくりに一緒に取り組んでくれる人を探すことが最も苦労するポイントである。

③平和志向のまちづくりと歴史継承

・平和なまちづくりとは、平和を享受していることに感謝の念を持つことが根底にある。この状況を勝ち取るために亡くなった人がたくさんいる。いろんな人の努力によって紡がれている状態を当たり前だと思わないことが大切。

・戦争は非現実的で絶対やるべきではないが、今の情勢を考えると先行きは不透明。何があっても自分の街や家族を守るという意識も大事だと思う。

④平和に向けた取組みの課題

・（学生が提案した）大津島の資料の徳山駅での展示については、遺族の中には人目に触れることを望まない方が一定数いる。平和教育の難しさは、実際に家族を失った人の感情への配慮と、わかりやすく伝えることのバランス。

・平和のために学生にできることとしては、今回のアプローチのように歴史から紐解くアプローチは重要で、一般の人はなかなか興味が持ちにくいところを、戦災から復興する姿をアニメや漫画などわかりやすい形で伝えることは大事だと思う。

・自分たちのルーツを知ることが大切。ご先祖様の連なりの中に今の自分があることをリアルに感じ、そして感謝の気持ちを持つことが重要。

図 16　インタビュー風景

図 17　まち歩き

3-2-2　古谷ニーナ氏（下松市在住・ウクライナ出身）講話

（1）ウクライナとロシアの戦い

・ウクライナは欧州第 2 の広さを持つ国で、長い間ロシアの支配下にあった。
・34 年前に独立したが、現在もロシアと戦争状態にある。
・「兄弟国」という認識は誤りで、実際には植民地支配を受けてきた。ロシアの支配に戻ることはウクライナ人にとって最も恐ろしいことである。
・ウクライナ人は「自由（ヴォーリャ）」を最も大切にし、歴史的に自由を奪われてきた経験から強い執着を持つ。
・戦争の中でも教育・人権・積極的平和の重要性を訴え、若者や他国に行動と関心を呼びかけている。
・毎日攻撃が続き、地下での避難生活や電力不足が常態化。教育はオンライン中心となり、日常の小さな幸せを実感するようになった。
・ドローンが大量に使われ、前線が膠着。ヨーロッパ上空にも飛来しており、新たな安全保障上の脅威になっている。
・多くの兵士は元民間人で、男性の国外脱出は禁止である。強制動員が社会問題化している。
・ウクライナはかつて核兵器を保有していたが、放棄後に安全保障の約束が守られず侵攻を受けた。平和国家でも戦争に巻き込まれる危険がある。

（2）ウクライナの平和について

・ウクライナが望む平和とは、単に戦争がない「消極的平和」ではなく、人権と尊厳が保障された「積極的平和」を目指している。

・安易な譲歩は戦争を拡大させる（ミュンヘン協定の例あり）。宥和政策は注意が必要。停戦の「方法」が重要であり、妥協的な和平は危険である。
・戦前はロシア語が優勢だったが、開戦後はウクライナ語と文化の復興が進行している。ロシアは歴史的に他民族文化を抑圧してきた。
・戦争によって国民の政治意識が高まり、ロシア寄り政治家の影響力が低下。
・戦争終結したら、ウクライナ全土を旅して祖国の姿をとらえ直したい。

（３）日本へのメッセージ

・人間の歴史を見ると、争っている時間がほとんどで、平和はあっという間になくなる。今回は平和が 80 年ぐらい続いているが、パっと光って消えそうな時期かもしれない。平和を守るのは難しい。平和の基礎は教育にあり、人権や道徳を重視し、無関心（平和ボケ）を避けることが重要である。
・ウクライナも日本も、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんたちが国のためにいろいろやってきて良い国ができ上がった。それをただ利用するのではなく、守り続け、時代変化に合わせて調整していく必要がある。
・積極的に行動しないと積極的平和は得られない。若者が政治参加や社会貢献に積極的に関わることが重要。日常の小さな行動から平和は始まる。
・若者が政治参加や社会貢献に積極的に関わること、そして行動を起こすことが必要である。

図 18　古谷ニーナ氏と学生

図 19　琴山素行氏と学生

3-2-3　琴山素行氏（周南市在住）講話

（１）徳山空襲

・太平洋戦争末期に山口県徳山で二度の空襲を体験した。最初の空襲は 1945

年 5 月 10 日、米軍の B29 爆撃機によって海軍燃料廠が攻撃を受け、多くの死者が出た。燃料廠は戦艦「大和」が燃料補給した場所でもあり、その後戦艦大和は沖縄へ出撃する途中、米軍の空からの攻撃で撃沈された。二度目の空襲は 7 月 26 日深夜、終戦直前の大規模な市街地空襲だった。

・夜中にサイレンが鳴り響き、徳山の街はたちまち炎に包まれた。家族は防空壕に逃げ込み、火の手から逃げる途中で死体を見たり、機銃掃射で人が亡くなるのを目撃した。家の周囲は全焼したが、幸い自宅だけは奇跡的に焼け残った。その後、住民たちは焼け跡から材木を集め、バラックを建てて生活を始めた。

（2）戦時中の生活状況

・戦時中、徴兵は 20 歳から 40 歳だったが、最終的には 45 歳までの男性が対象となった。兵力不足のため学徒動員で大学生までもが戦地に送られたが、彼らの多くは戦闘ではなく、飢えや病気で命を落とした。

・戦争末期には物資不足が深刻化し、金属を集めるために家の釜や鍋、お寺の鐘までも供出された。航空機には鉄の代わりにベニヤ板が使われたといわれた。それでも軍部は降伏を認めず、戦争を続けようとしたが、最終的には天皇の決断によって戦争は終わった。終戦当時、日本の男性の平均寿命はわずか 23 歳 6 か月であり、いかに多くの若者が命を失ったかが分かる。

（3）戦後の生活状況

・終戦後の生活は極度の食糧不足に苦しめられた。配給はほとんど届かず、家庭菜園で育てた芋が唯一の食糧だった。子どもたちは泥のついた芋をそのまま生でかじることもあった。学校でも雑草を乾かして粉にし、それを混ぜてパンを焼くような状況だった。

・服も満足に手に入らず、ボロボロの服を繕って着続けた。ノミやダニ、お腹の中には回虫がいた。学校で全生徒に虫下しが配られた。DDT（有機塩素系の殺虫剤）を頭からかけられることが日常だった。

・物も食料も乏しい中で、貧しかったが、みんな助け合い、いじめなどなかった。当時の学校の教師は元軍人が多く、体罰は当たり前だったが、それでも人々は支え合って生きていた。

（４）戦後復興と平和について

・戦後、日本は文字通りマイナスからの出発を強いられた。街は焼け野原となり、産業も壊滅したが、人々は努力と協力によって復興を成し遂げた。

・今の日本は、清潔な水道があり、国民皆保険が整い、世界一品質の高い製品を作る国になった。これほどの発展を遂げた国は他にない。同時に、日本がこれほどの国になれたのは、戦争の悲惨さを忘れず、平和を大切にしてきたからではないか。

・8 月 15 日は「終戦記念日」ではなく「敗戦記念日」にすると良い。これは日本が戦争に敗れたという事実を直視し、二度と同じ過ちを繰り返さないようにすることが大切だという強い思いが込められている。

（５）平和への道

・平和の維持を一層進めるためには、とにかく思いやりを持って平和に生きることではないか。今でも戦争を続けている地域があり、他人に対する思いやりがないところが目に付く。本当の意味での平和を追求してもらいたい。

・学生ができる平和志向のまちづくりとは、身近なところから外国人と交流し、助け合うことが平和への第一歩である。たとえば、街で外国人を見かけたら笑顔で挨拶をする、相手の母語で一言声をかけてみる。そうした小さな思いやりの積み重ねが、国や文化の違いを超えた相互理解につながる。

４．とりまとめ作業およびアウトプット

10 月に 4 月～ 8 月までの活動記録の取りまとめと併行して、「平和の島スピーチコンテスト」での平和に関する研究発表および「平和志向のまちづくり成果発表会」の発表資料の作成、準備を行い、それぞれ発表を行った。

４-1　平和の島スピーチコンテスト」での発表

〇日　時　2025 年 11 月 1 日（土）13:00 ～ 16:00

〇会　場　山口県周南総合庁舎 2 階さくらホール

〇発表者　周南公立大学経済経営学部学生　3 名

○発表テーマ　『平和志向のまちづくりに向けて』

○主　催　周南観光コンベンション協会

中学生と高校生が平和への思いを語る「平和の島スピーチコンテスト」において、学生による平和に関する研究発表として、主に 4 月から 8 月までの活動を集約し調査・活動状況とまちづくりへの提案を発表した。

4-2　平和志向のまちづくり成果発表会概要

○日　時　2025 年 12 月 13 日（土）14:00 ～ 16:00

○会　場　周南市立駅前図書館 交流室 2

○発表者　周南公立大学経済経営学部学生　16 名

パネリスト　工藤洋三氏　（元 徳山工業高等専門学校 教授）

河村啓太郎氏（㈱まちあい徳山 代表取締役）

川上浩史氏　（周南市文化スポーツ観光部次長 兼 文化振興課長）

コーディネーター　伏木貞文

○内　容

・学生による「平和志向のまちづくり」発表、提言書の手交

・パネルディスカッション

・ビデオメッセージ

・学生による調査内容のパネル展示

○共　催　本学地域イノベーションセンター、周南市

図 20　提言書手交

図 21　パネルディスカッション

〇学生の発表内容

（１）復興からの学び

レガシー・メモリ班（遺産、記憶）の活動成果は前章までの内容と重複するため、主に、クリエイト班（生活・まちづくり）の活動成果をまとめる。

戦後からの復興の歩みを踏まえ、このまちを守るために必要な人材を育成すること、空襲や過去の徳山市について周南市の住民に知ってもらう必要があること、戦争での大きな被害にあった沖縄や長崎、広島などではより積極的に平和宣言や平和活動を行っていること等を指摘し、空襲被害に遭った街として積極的にこれらの活動を行っていくべきであるとした。

（２）環境面のアプローチ

自然環境はまちづくりにとって、心身の健康、防災、コミュニティ、経済などの都市の根幹を支えるものである。周南市は瀬戸内海を臨む美しい自然環境を有しているが、戦時中、空襲により市街地は壊滅的な被害をうけ、海軍燃料廠では 500 ポンド爆弾が 240 トン投下され、環境への影響も極めて大きかった。戦後、自然環境も時間とともに回復したものの、大気汚染・水質汚濁などの公害問題が表面化し、環境質は現在横ばいになっている。戦後復興を経て、現在岐路に立つ周南市の環境を守り続けるためにも、私達は自分の街の環境について知り自分事として考える必要がある。

（３）衣服の観点から

戦時中は国家総動員法により、あらゆる経済活動、国民生活を戦争遂行にふり向けるために経済統制を図った。男女の標準服を設定し、米の配給や衣服点数切符制を実施した。女性の標準服はあまり普及せず、ほとんどが元々持っている服を使ってもんぺ服にした。戦時中は自分で修繕して同じ服を着たが、現代では一般的に服を定期的に買い直し、同じ服を着続けることは少ない。経済産業省によると、リユース品の価値の低下や新規回収コストにより、衣料品の資源回収が人口ベースで約４割回収できていないこと、混紡品が多く現在のリサイクル技術では対応が困難なことが指摘されており、単に戦時の状況を否定するだけでなく、資源の有効利用という観点で当時の衣服の再利用の習慣を踏まえて見直す必要があるとした。

（4）食の観点から

WFP（ワールド・フード・プログラム）は、世界の10人に1人が依然として空腹のまま眠りについており、紛争下で食料支援を通じて平和と安定への道筋を構築している。このように食は生きるために必要不可欠であることから、食の充実が「平和志向のまちづくり」につながるとみなす。

平和志向のまちづくりの一例としてフードロス削減で、フードバンクの推奨が挙げられる。一人ひとりの心掛けがフードロス削減に大きな影響を及ぼすことを意識するべきとした。

（5）戦時中のくらし

戦時中は、国民全員が厳しい生活を強いられた。男子は兵士として戦争に参加し、25歳未満の未婚女子は女子勤労挺身隊として兵器などを生産した。次第に戦況が悪化すると、大学生、高校生の男子学生が学徒動員で徴兵された。

また、思想の統一のために厳しい言論統制が敷かれた。食糧は1人あたりに決まった量を配る配給制が始まり、砂糖やマッチから次第に米などの食糧も配給制へと変わった。

（6）平和を守るために私たちができること

積極的に政治に参加し、街づくり・国づくりに関わること、選挙投票率向上、政治家プログラムのチェックや、日常の小さなことから思いやりを実践すること、事実を風化させることなく伝え続けること、平和であることの感謝をもつことなどを説いた。

これらをもとに、周南市に提案した内容は次のとおり。

○『平和志向のまちづくり』に向けたプロポーザル（提案）〔概要〕

次のことを周南市に対して提案するとともに、今後、私たち自身、行動に移していく。

1．市民に対し、平和の大切さや過去の経験を忘れないように、働きかけ、発信し続ける
2．街の自然環境を豊かにしたり、フードロスを削減するなど、ひいては平和を志向するアプローチ（活動）を積極的に支援する
3．まちづくりについて、住民のニーズを把握し、まちづくりの覚悟をもつ人材の発掘、養成に努める

４．平和の重要性と歴史を受け継ぐ教育を一層推進する
　～歴史を紐とき、相手の立場に立ち、客観的な視野で思考する、そして、日々大切に生きること～
令和７年12月13日　　「平和志向のまちづくりの会」会員一同
　　周南公立大学経済経営学部　伏木ゼミ生有志

５．おわりに～課題と展望～

白井（2011）によると、伝統的に行われてきた一斉授業型は、知識や情報を効率よく伝達し、その質が保証できるうえ、授業設計が容易である一方で、学習者が知識や技術を身に付けようとする積極的な態度がなければ学習効果は大きくなく、内発的動機付けを喚起しにくいとされている。これに対し、グループ学習などアクティブラーニングを取り入れた授業では、内発的動機付けを喚起しやすく、学力の剥落が起きにくいと言われている一方、伝達する知識や情報量に限りがあり、場合によっては、低いレベルの学習者に合わせてしまう危険性もあるとしている。

こうしたことを踏まえ、両者を併用し、互いの長所で欠点を補完し合うことに留意し学習、体験活動を進めた。

表３　学習のタイプ別特徴

	一斉授業型学習	能動的学習 （アクティブラーニング）
長　所	・知識や情報を効率よく伝達でき、その質が保証できる。 ・短期間で効率よく知識や技術が身に付けられる。	・内発的動機付けを喚起しやすく、学力の剥落が起きにくい。
短　所	・学習者の積極的な態度がなければ、学習効果は大きくない。 ・受動的になりやすく、内発的動機付けを喚起しにくい。	・伝達する知識や情報量に限りがあり、低いレベルの学習者に合わせてしまう場合がある。

※白井（2011）から筆者作成

参加学生からは、一様に、これまでの調査・活動をとりまとめ発信できたことに対する安堵や充実感が表明された。

さらに、「アウトプットすることでさらに新しい発見をすることができた」、「平和について自分自身が考えられたと同時に、地域の方に過去を伝え、今すべきことを主張することができ良かった」、「（パネルディスカッションでは）私の考えていたことのいくつも先の視点での意見が飛び交っていて・・・まだまだ成長していくことができる」など、とくに成果発表会（市への提案書、市民へのメッセージを含む）により、より強い達成感や、今後の学習意欲を窺うことができる内容などがあり一定の学習成果は得られたと考えられる。

能動的な学習の短所である、知識や情報量が限定的で低いレベルの学習者に合わせてしまう可能性も、スライド発表およびパネル展示物作成等により、受けとめた事実や考えを言語化し公の場で発信することを通じて、学習者に一定の印象を残すことで回避することができたと考える。

また、当初から「間接的平和」（広義の平和）を目指してきた学生が、徳山空襲などを今の自分たちが生きる世界と「地続き」であることを認識し、足元の自分の生活を見直したり、思いやりや他者との適切なコミュニケーションなどの重要性に気づき、小さな一歩から始めるとの決意が表明されたことは一定の評価はできると考える。

一方、全体として、平和の希求、次世代への歴史の継承の必要性についての意見にとどまり、目の前の平和を維持するための実社会での具体的な方策や、戦争を回避したり、戦争を止める方策など現在世界が直面し、日本を取り巻く流動的な環境を見据えたアクションに言及する学生は少なかった。

今後の課題として、先行研究や史実等に基づき思考をさらに深めるため、特にグループごとの活動後は、一旦、グループを解いて意見交換や教え合い等の時間を増やし、課題の発見やより広い観点の考察へいざないたい。また早い段階から SNS による活動状況を発信し、効果的な情報発信と社会との適切なコミュニケーションについても学びを得ることを目指したい。

このほか、経済的側面からのアプローチとして、徳山空襲による想定被害額、戦災復興費用など経済的損失を試算し、戦争の愚かさ、平和がもたらす経

済的利益、配当を明らかにしたい。

図 22　学内にて地域ゼミ生一同

【参考】「平和志向のまちづくり」調査・検討に係る活動実績

・活動方針、活動体制の検討（4/16、4/23、4/30）
・徳山空襲等の資料収集（4/23、4/30）
・調査計画の検討（5/14、5/21、5/28）
・徳山空襲のビデオをつくる会（1999）「語りつぐ徳山空襲」（映像３部作）視聴（5/21）
・「令和７年度 山口きらめき財団助成事業」に採択（5/29 交付式）
・「回天」関係の下調べ、大津島訪問準備（6/11、6/18）
・大津島ツアー（回天記念館等視察）（6/22、7/8）
・大津島ツアーの振り返り、報告作成（7/2）
・周南市民俗資料館企画展視察の下調べ（7/9）
・周南市民俗資料館企画展「戦中・戦後のくらし」視察（7/16）
・演劇「あゝ大津島　碧き海」観劇（周南市文化会館）（8/3）
・講演会「米軍記録による徳山空襲」参加（徳山保健センター）（8/9）
・戦後 80 年子ども向けワークショップ参加（周南市民俗資料館）（8/13）
・紙芝居「平和を愛する徳山大仏」参加（周南市役所港町庁舎）（8/20）
・成果発表会の計画、前半の活動を踏まえた個人レポート作成（10/1、10/8、10/15）
・河村啓太郎氏への質問検討（10/8）
・古谷ニーナ氏、琴山素行氏への質問検討（10/15）
・河村啓太郎氏（株式会社まちあい徳山代表取締役）インタビュー（まちあい徳山）（10/20）
・古谷ニーナ氏（ウクライナ出身）講話（524 教室）（10/22）
・琴山素行氏（戦時中体験）講話（524 教室）（10/29）

・「平和の島スピーチコンテスト」における平和に関する研究発表（中間報告）（周南総合庁舎・さくらホール）（11/1）
・光市砲台跡探索、「回天の碑」（元光海軍工廠内）訪問（11/8）
・河村啓太郎氏、古谷ニーナ氏、琴山素行氏からの聴取情報の整理等（11/12）
・成果発表会の担当決め（11/12、11/19）
・成果発表会用資料の調製（スライド・パネル展示等）（11/19、11/26、12/3、12/10）
・成果発表会（12/13）

【謝辞】

若い世代のためにと、体験を語っていただいた皆様には、衷心より厚くお礼申し上げる。

平和志向のまちづくりの会の活動は公益財団法人山口きらめき財団「若者チャレンジ応援事業」（令和７年度）の支援を受けた。また、周南市文化スポーツ観光部文化振興課には、当成果報告会を市の戦後 80 年行事の最終イベントとして位置づけていただき、開催にあたりご協力いただいた。ここに記して感謝の意を表す。